

源氏物語歌絵

田村, 隆
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9087>

出版情報 : 文献探究. 44, pp.1-, 2006-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

源氏物語歌絵

(九州大学附属図書館支子文庫蔵)



解説

田村 隆

賀 わかな

朱雀院の五十の御賀をみこたちつとめ奉り給ふに、女三の宮にきんををしへ給て、心みに御かたくあつめ奉りて、御かくをはしめ給。是を女かくと申也。女三の宮はきんの御こと、紫の上はわこん、女御はさうの御こと、あかしの上は琵琶、源氏はしやうかし給ふ。笛は夕きの御子、玉かつらの御このおさなき、みすのとにてふき給。いと目出度わさ也。

この『源氏物語歌絵』(卷子本一巻、近世中期写)は、『源氏物語』中の有名な場面を描き、それに簡単な説明とそこで詠まれた和歌を添えたものである。春・夏・秋・冬・賀・祝の六場面から成る。

ここに掲げるのは、そのうちの「賀」部である。若菜下巻の一場面。二月に予定された朱雀院五十の賀に先だつて、源氏は女楽を催した。(画面右奥から)女三宮は琴、紫の上は和琴、女御は箏、明石君は琵琶をそれぞれ演奏、源氏も唱歌し、夕霧や玉鬘の子達も幼いながらに笛を吹き合わせる。ただし、『歌絵』とは言いながら、この賀部には歌がない。物語原文でもこの辺りでは歌が詠まれていないためである。

注目されるのは右に翻印した詞書部分である。『源氏物語』の本文では奏者の女君は「明石の御方、紫の上、女御、宮」の順で紹介されており、詞書とは異なる。詞書の順序は、実は南北朝期成立の『源氏物語』梗概書、『源氏小鏡』のそれと一致する。女楽周辺の『小鏡』の本文を掲げてみよう。引用は、『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、平成十七年)所収の諸本の内、詞書との類似点が多い無刊記整版本による。

朱雀院の五十の御賀を、御子たちつとめたてまつり給ふ。……うちくに心みんとて、正月廿日はかりなれば、春の夜、のとかにかすむ夜、御かたくをよひたてまつりて、御衆あり。これを女かくといふ也。タきりの大将みすのにて、御ことはかりとへのへて参り給ふ。女三の宮のきんの御琴、むらさぎの上はわこん、女御はさうの御こと、あかしの上はひわ、源氏はしやうかし給ふ。ふえは夕きの御子、ひけくろの大将の御、玉かつらの御腹の子、これ、いとおさなくて、さうの笛ふき給ふ。さて、いづれもおもしろく有しなり。

奏者を紹介する順序はかりでなく、表現もかなりの部分で符合することがわかる。物語を梗概化して詞書を作成するにあたり、『小鏡』を参照したのである。他の場面においても、和歌については『小鏡』にないものも含まれるものの、詞書の長い箇所を中心に、『小鏡』の表現に類似する点が散見される。奈良絵風の挿絵を伴つ『小鏡』と云えば、先年訪れたミュンヘンのバイエルン州立図書館に所蔵される嫁入本とおぼしい五冊本『小鏡』(Kleiner Spiegel der Genji-Erzählung)などが知られるが、『歌絵』におけるこのよつな制作事情は、『小鏡』が広く流布していたことを改めて裏付ける。

尚、本『歌絵』は、他の『源氏物語』関連資料と共に、本年度九州大学附属図書館貴重文物展示「源氏物語の本いろいろ」(平成十七年五月九 十八日)及び、福岡県図書館協会設立記念展示「源氏物語 中世から現代まで」(平成十八年二月二十三 二十八日)において展示された。